

アメリカにおけるセーフコミュニティ活動 視察報告

下記の通り、アメリカの SC 支援センターのご厚意により、アメリカにおける SC 活動の様子と支援センターの支援の状況について情報収集するとともに、実際に活動を展開している2つのコミュニティの活動を視察する機会を得ることができた。その内容について、簡単に報告する。

1. 視察の概要

行程：2014年3月4日（火）～7日（金）

視察： 3月4日 セーフコミュニティアメリカ 視察

3月5日 セーフコミュニティマディソン 視察
（ウィスコンシン州 マディソン市）

3月6日 午前 同上

午後 セーフコミュニティ ニューレノックス 視察
（イリノイ州 ニューレノックス村）

2. 視察概要

2-1. セーフコミュニティアメリカ（SCA）ⁱ

SCA は、イリノイ州アイスカタにある全米安全協議会（National Safety Council : NSCⁱⁱ）に設置されている。アメリカにある4つのSC支援センターの一つであり、それぞれ「成果の測定・評価」「研究」および「セーフスクール」などと支援の対象が特化されている。そのなかで、このSCAは、コミュニティの活動及び認証を支援するとともに、他の支援センターとコミュニティとの橋渡しも行う点からもJISCとの共通点が多いことから今回の視察を希望した。



今回は、代表のドナ・ステイン・ハリス（Donna Stein-Harris）氏およびプログラムマネージャーのスジャ・シュンムガヴェル（Suja Shunmugavelu）氏からアメリカのセーフコミュニティの進め方と支援センターのサポートの方法と内容について説明をいただいた。

① SCA 設置と活動の経緯

NSCは、交通事故、労働安全、家庭の安全等の領域に関する問題を主に扱っている。もともと、交通安全や労働安全に関する取組は活発に展開しているが、国民の安全という視点からみると、より多くの領域をカバーすることが必要となる。また、コミュニティとして取組むことも重要であることから、セーフコミュニティの概念に関心を持つに至った。そこで、まず、スウェーデンのSC協働センターを訪問し、その概念等を学んだとのことである。

2007年にSC支援センターとして認証を受け、2010年にSC認証センターとして認証を受けている。また、近年では、国内版SC認証制度を開始しており、こちらもコミュニティからの関心が非常に高いとのことであった。

②セーフコミュニティの特徴について

アメリカにおけるセーフコミュニティについては、日本や韓国と異なり、地方行政が必ずしもイニシアチブやリーダーシップをとっているわけではない。むしろ、その事例は少ないという。地域の様々な団体等が集まり組織化された連合体（Coalition）がSC推進母体となっている点は台湾のスタイルと似ている。

この組織においてリーダーシップをとっている主体は、コミュニティのよってさまざまであるという。小さなコミュニティの場合は、警察や消防、安全関連組織が多いようだ。一方、大きなコミュニティでは、行政の地域保健担当部署や保健センターなどが主になっている傾向がみられるという。

このSC連合は、日本でいうところのSC推進協議会に位置づけられる。ここでは、セーフコミュニティの進め方をはじめ、具体的な取組みの展開方法などあらゆる事案が積極的に検討されている。一方、行政のかかわりをみると、積極的に関与・支援している。そのため、SC申請する際の代表は行政ではないが、市長や警察等も協力的なパートナーとして重要な役割をになっている。

③コミュニティの支援について

SCAは、コミュニティから問い合わせがあると、まずSCの概要及び進め方について説明を行う。必要に応じて訪問するが、国土が広いこともあり、あまり頻繁には訪問しない（というか、できない）。また、訪問にかかる費用は、コミュニティにとっても負担となるため、できるだけメールや電話で済ませているとのこと。

ただし、毎年「定例会議」を開催しており、ここには全国からコミュニティが集うので、その際に個別の支援なども行っているという。

このたび、新しく導入された（オンライン申請など）認証制度については、海外の審査員が遠方から任命されるばあいはコミュニティの負担が多くなることと文化や社会制度、社会資源などの背景に関する知識がないと審査は難しい点から危惧している様子であった。そのため、しばらくは国内版の認証に対する希望はあるが、国際版の認証への希望は出ていない様子である。

これまでの経験からみると、カナダの審査員であっても、アメリカとは社会制度が異なることから審査の視点が異なると実感したことがあるとのこと。たとえば、とあるコミュニティでは「銃の安全」という取組をしていたが、銃の保有を許されていないカナダの審査員は、このテーマはおかしいと指摘したという。アメリカでは、法律上は銃の保有は認められているので、そもそも保有すること自体が間違っていると指摘されても・・・ということで非常に陰鬱なムードになったという話であった。

そのような場面を調整するのも支援センターとしては必要であると理解しているため、SCAとしては、審査員の一人、あるいはオブザーバーとしてアメリカの実情が分かる支援センターが同席することを提言していきたいとのことであった。

また、近年では、大学のセーフコミュニティ認証も関心が高まっており、大学との連携も進んできている。(なぜ、大学がSCか?セーフスクールではないのか?という声もあるが、アメリカの大学の規模は日本などとは異なり、キャンパスは広大である上に、広大な居住エリアがあり、スポーツ・余暇施設、商業施設なども多様に設置され、独自の大学警察が治安を守っている等、まさに「まち」として機能していることから、アメリカではSCとして認証している。

また、SCAは、取組の評価についても力を入れている。毎年、自己評価の提出を求めているとともに、NSCの研究チームとともに、評価の方法について開発・支援を行っている。現在、簡単な自己評価チャートを作成しており、各コミュニティにこの提出を求めている。このチャートに答えることで、コミュニティは、自分たちの取組を振り返るとともに、次に何をすべきかを考えるきっかけを提供している。



加えて、専門的視点から、NSCの研究チームがコミュニティに入り、量的および質的な評価測定方法を検討しているとのことで、今回もその4人のメンバーが同席くださった。

研究チームからは、日本では、どのような課題があり、どのような評価に関心があるのか、という問いがでたので、「けがや事故の件数だけではなく、SCに対する関心の背景には地域のきずなや協働がある。それらをどうやって測定したらよいのか」と逆に質問したところ、今後、いくつかの文献の紹介をいただけることとなった。

この研究チームとは、セーフコミュニティとして「何を評価したらよいのか」等について議論ができたことは、今後の方向性を確認するうえで有意義であった。

④ NSC 施設案内

その後、SCAが設置されているNSCの案内をいただいた。NSCは「家庭の安全」「労働安全」「交通安全」に取り組んでいる組織であるため、それに関する各種講習会等も随時開催されている。そのため、多くの講習室が用意されている。